

## 超現実の戦争

小島なお

『短歌名言辞典』のなかで塚本邦雄は写生についてこのように書いた。

リアリズムとは、決して、実際に存在したことを、そのまま忠実に再現（記録）することではあるまい。未だ現に経験していない諸相を、存在した以上に鮮烈に活写することではないのか。それこそが詩歌における、二十一世紀へのあり得べき「写生」であり、同時に「象徴」に他なるまい。

理性の支配下にある現実を超越する思考の働きこそが本来のシニールレアリスムであり、白秋の、茂吉の、塚本の言う象徴の根にある志向にも非常に近いものを感じる。一方で、もし塚本の書いたことが真実であるなら、歴史の記録的側面を持つとされる戦時詠を私たちはどのように読むべきだろうか。

たかひの最中静もる時ありて庭鳥啼けりおそろしく寂し

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す

数知れぬ弾丸をし裏む空間が火を呼ぶこ

とくひきしまり来つ

宮柊二「山西省」からの三首。互いの銃声がひととき止み、ふいに訪れる静寂。農村にひびく庭鳥の声のどかさがかえって張りつめた空間の異様さを印象付ける。二首目は一対一の殺傷の場面。「まるで恋人をゆつくり抱き寄せて抱擁するような動作」と評したのは高野公彦だが、あまりの静けさゆえに美しささえ錯覚させる言葉の回転である。三首目も不思議な把握が目を引く。弾丸が飛び交っているのにも拘わらず、ここには人の気配があらかじめ消されている。戦闘の中に身を置く者のみが感受する真空状態にも似た空間の伸縮。宮の戦争は、いかに壮絶な場面であってもどこか奥底に静の感覚が貫かれている。

そしてもうひとり独自の戦地詠の地平を拓いた軍医・米川稔の歌も挙げておきたい。

夜なよなに身にちかくものはばたくをいまだ鳥獣のいづれとも知らず

密林の長さ夜ごろをさめやすく鼠額を超え蜥蜴は脛を這ふ

敵六十機いま来向ふと聴く空の昆虫の遊

びたまゆらかなし

これらの作品が収載された『鋪道夕映』は米川の死後、同じ「多磨」同人であった彼を高く評価していた宮が編集した遺歌集。二ユ一ギニア東部の密林のなかで孤立した末の飢えと病気との闘いが米川の戦争だった。身めぐりに生息する鳥獣の命。その蠢きによって、極限状態にあるみずからの命を観照する。その蠢きはときに鼠や蜥蜴の姿で現れ、寝ている身体を這い回る。しかしすでにそれらを払いのける気力はなく、島に幽閉されたまま命を終えるもの同士の親しい諦めが滲んでいる。向ってくる六十機の機影と、空中で遊びをする昆虫たちの飛行をまなざす三首目。戦闘という死への接近と、生の遊び。類似と対照、緊張と緩和の引き合いに無心のかなしみが湧いてくる。

宮の静の感覚、米川の自然観、いずれも戦争の記録、つまり事実と捉えるにはあまりにも何かが過剰にうつくしく、不気味で、統制されている。実体主義に傾きがちな戦時詠だが、私たちはつねに留意しなければいけない。戦争という信じがたい現実にも身を置かざる得なかつた者の、自分を護る唯一のよすがは、現実を克服し、超越しようと試みる心のリアリズムであつたはずだということを。